

2013

5回目を迎えた県政報告会

毎年定期的に行ってきた県政報告会も5回目を迎えました。「国政や市政には興味があるけど県政はねえ」「県政って何をやっているのかわからない」という声を多く耳にしてスタートした県政報告会ですが、毎回多くの方に足を運んで頂けるようになりました。中には皆勤賞という方もいらっしゃいます。ありがたい気持ちでいっぱいです。

2014年も引き続き、わかりやすくをモットーに、県政のご報告をさせていただきますので、ぜひご参加ください。



多くのイベントに参加

県議となって3年目になり、様々な地元のイベントにご招待いただけるようになりました。もちろん、飛び込み参加することもあるのですが、地域の方と交流し、お話しできる機会が持てることは大変ありがたいことです。

普段から県政を身近に感じて頂くためにも、まずは県議会議員としての私をもっと親しみやすく話しかけやすい存在でなければいけないと感じています。

私は日頃からこのようにしようと思っている行動指針があります。

- 一、笑顔で誠実に、人の話に耳を傾けること。
 - 一、新たに創造し開拓する努力を怠らないこと。
 - 一、感謝の気持ちを忘れず、協力しあうこと。
- 今年もこの気持ちを忘れずに、活動していきたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

茨城県議会議員

大谷明 NEWS



12号

2014年 1-3月



茨城県議会議員として、4年目を迎えました。

こんにちは。厳しい寒さが続いておりますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

早いもので、私も県議として4年目を迎えます。

選挙期間中、応援に駆け付けてくれた方のお子さんが、当時0歳でベビーカーに乗っていたのですが、もう幼稚園に通っているそうです。元気よく走り回っていて、先日私に、パパとママには内緒のヒミツの話をしてくれました。

ぐんぐん成長する子どもたちに接すると、私も県議として日進月歩、昨日よりも今日、昨年よりも今年、自分は成長できているのかと振り返させられます。

今号では、新人議員として精一杯取り組ませて頂いた3年間の活動をお伝えします。

今年も皆様からのご意見、ご指導、そして温かいご支援を心よりお願い申し上げます。

茨城県議会議員 大谷明

第6回大谷明県政報告会〈30分拡大版〉のお知らせ

いばらき医療ミニフォーラム「お医者さんのもっと上手なつきあい方。」

ゲスト：茨城県医師会会長・小松整形外科医院理事長 小松満先生
松戸神経内科・せんぼ東京高輪病院 高橋宏和先生

平成26年2月23日(日) ワークプラザ勝田(1F多目的ホール)
午後2:00(1:30開場)~4:00 無料・申込不要



大谷明が取り組んだこと ~その4

問題の“根っこ”から考える

~子育て教育本

2012年は、文教警察委員会ではじめの問題と向き合いました。しかしそれ以外にも虐待やひきこもりなど、子どもに関する問題が後を絶ちません。こうした問題の根本をしっかりと見つめなおし、2013年の一般質問の場で取り上げさせていただきました。

人と人のかかわり方や信頼関係の土台は、0歳から3歳までの乳幼児期に最も豊かに育つと言われております。乳幼児期に自分が要求したことが満たされるといった体験を

し続けると、周囲の人や世界に対する信頼と自分に対する基本的な自信の感情が育まれてくるそうです。

そうしたことを、1歳の娘を持つ私も含め、もっと広く子育て中の親御さんが知っていればと思い、0歳からの家庭教育本の提言をしました。

教育長からは、専門家も交えて製作を進め、2014年には配布を開始したいとの答弁を頂きました。

この本が少しでも子育てに向き合う親御さんの一助になればうれしく、また一人でも多くのお子さんが、自分に自信を持ち、人のことを信じられるように育ってくれればうれしく思っています。



朝の勝田駅で広報誌を配布 農林水産委員会にて質問 地元のイベントで餅つき 勝田駅周辺のごみ拾い

大谷明が取り組んだこと ~その1

何度もしつこくが 少しでも実を結ぶ ~薄暮時の交通安全対策

県議として様々な県の課題に向き合いますが、多くの方に身近で大切なテーマの一つに、“交通安全”が挙げられます。新聞で痛ましい事故のニュースを見ると心が痛むと同時に、しっかり向き合わなければならないと思います。

事故の発生件数は、一日の中でいつ頃が一番多いかご存知でしょうか。薄暮時が圧倒的に多くを占めます。この薄暮時の交通安全対策として、2012年の文教警察委員会では「早めのライト点灯」、2013年の一般質問では

「反射材の着用」への取り組みについて要望しました。「早めのライト点灯」はヨーロッパでは義務化された国もあります。呼びかけのためのキャッチコピーの見直しはもちろん、教習所での働きかけについても提言しました。

もっと能動的に真剣に取り組んでほしいと要望したところ、昨年からはひたちなか市内に「ライト点灯は早めに」というのぼり旗を見かけるようになりました。

引き続きこの問題には継続的に取り組んでいきたいと思っております。



(発行) 大谷明と茨城の未来をつくる会

〒312-0043 ひたちなか市共栄町9-12-101
TEL&FAX 029-219-7470

http://www.ohtani-akira.jp

大谷明 検索

震災直後の自転車活動

地域を細かくまわったり、道行く人と気軽に話せる移動手段として、日頃から活用していた自転車。2011年3月に発生した東日本大震災の時には非常に役立ちました。

電話が通じない中、自転車のおかげで避難所や被災現場をまわり、地域の声を災害対策本部に届けられました。

災害時は、情報なしには的確な対策が取れません。情報をどう集め、どう提供するのか、今後の大きな課題だと新たに問題意識を持ちました。

このたびの震災では、ひたちなか市の対策本部に県職員の方が派遣されていました。県側の情報を伝えると同時に、市の状況を把握するためです。しかし、派遣先で何をするか戸惑っているところもありました。

翌年の予算特別委員会で、この件について取り上げました。せっかく派遣された貴重な人材です。県の執行部からは、よりきめ細かなマニュアルを整備し、震災時にしっかり活動できるよう訓練の徹底を図りたいとの答弁を頂きました。

震災のことを忘れないうちに、きめ細かに内容を詰めていく必要があります。今後も力を抜かず努力して頂きたいと再度要望しました。



初めての「一般質問」

12月の議会で、初めてとなる一般質問を行いました。一般質問とは、これまでの取り組みを問い正したり、見直しを要請したり、新たな視点を取り入れてもらう重要な機会です。10の質問をさせて頂きましたが、その中で一歩前に前進させられたものもあります。

そういう意味で、質疑応答の内容に非常に重みのある、大切な議員活動の一つです。

今後も地域の皆様の声を県政に届ける場として、一言一句に深い思いを込めて質問させて頂きたいと思えます。



保健福祉委員会にて、子育て環境に向き合う

子育て世代の共働きの進捗中、育児環境の整備は大きな課題です。24時間利用できる院内保育所のある牛久愛和病院で意見交換をしたり、地元ひたちなか市で「ママさん座談会」を開き、直接お母様方からお伺いする機会も頂きました。

一般質問でも、「病児・病後児保育」について質問し、病児対応型施設の増加、病児・病後児どちらにも対応できる訪問型の普及を進めてほしいと強く要望しました。



子育て環境に関しては、すぐには変わらないかもしれませんが、少しでも前に進めていきたいと思っています。

市内全学区で行った地区別勉強会

年に2回の県政報告会に加え、地区別の勉強会を8回にわたって行いました。県政報告会にご参加いただける方が多くなっていく一方で、「ある程度的人数で、膝をつきあわせて県政や地域の問題に関して話せる場があればよいのに」という声を頂戴したからです。

一方通行のご報告ではなく、もっとしっかり地域の声をお聞かせ頂き、よりよい県政のために反映できればと思い企画しました。

こちらで頂いたお話を参考に、所属していた文教警察委員会において県の執行部に提言する活動も行いました。通学路での安全対策において、学校側からの目線で考えがちな執行部に対し、登校時や下校時に立哨指導していて、どこが危ないかよく知っている保護者側の意見をもっと取り入れる工夫をするよう要請しました。



文教警察委員会にて、いじめ問題に向き合う

2012年は滋賀県大津市で起こった自殺といじめの問題が大きく報道されたのを受け、左記の地区別勉強会でも多くの関心が寄せられていました。

難しいテーマではありましたが、県政報告会でも取り上げ、委員会でも様々な提言をさせて頂きました。

いじめに関しては大人が早めに気づき、目を向けていくことが大切です。早期発見に向け、県は「いじめ解消サポートセンター」をスタートさせました。

しかしいじめはとても隠れやすいものです。仕組みだけ作って本当に機能するのか疑問を投げかけ、さらに一歩進んで、より根本的な問いとして、「人づくり」に関してどう考えているのか質問しました。

県の執行部からは、「『いじめはダメなもの』いじめは自分たちの問題だ』と思えるような取り組みを実施したい」という強い決意を頂きました。

さらに、もう一つ提言したことがあります。被害を受けた子の「逃げ場や居場所づくり」です。それは学校や家庭の中だけではありません。地域社会の中に、いかに多くその場所を作ることができるか、これは子どもを取り巻く地域社会全体の課題だと思います。



この問題については、委員会を離れても、引き続きしっかりと考えていきたいと思ひ、翌年の一般質問で取り上げました。(詳しくは次頁下の記事にて)

大谷明が
取り組んだこと
～その2

「現地現場」から発想する ～避難所のQOL対策

東日本震災時、市内の避難所を回って私が感じたのは、避難所のQOLの低さです。QOLとは、クオリティ・オブ・ライフの略で、生活の質のこと。余儀なくされる避難所生活ですが、そこでの生活環境は決していいものとはいえません。特に問題と思われたのが、「雑魚寝」です。

「雑魚寝」は低体温症やエコノミークラス症候群を発症するケースが多く肉体的・精神的な疲労につながります。それを回避できる手段として、「ダンボールベッド」の存在を知りました。2013年6月議会の一般質問において、



県に要望し、「ダンボールを活用した簡易ベッドを含め、避難所の良好な生活環境の確保が図られるよう、地域防災計画の改定を検討する」との答弁を頂きました。県内でダンボールベッド供給の防災協定が結ばれているのは、44市町村のうち4市町村にとどまっています。広範囲での被災を考えると、県として取り組む必要があると思えます。

大谷明が
取り組んだこと
～その3

「新しい視点」を提案する ～医師不足対策

茨城県の医師不足は深刻です。これまでも、医科大学への茨城県地域枠の創設、修学資金貸与等による医学部進学への支援、後記研修医の指導経費や研修手当の支援等、様々な施策が行われてきました。

そんな中、私が提案したのは「医療クラーク」の活用です。医療クラークとは、医師の事務作業の補助を行う仕事です。医師の先生方からよく聞くのは、直接の医療行為以外に日常の業務も多くあり、それに追われてしまいがちだということです。

医師の数を増やすことも大切ですが、多くの地域で医師は不足しており、地域間で医師の誘致競争は厳しくなっています。そんな中、医師の数を増やす施策だけではなく、医師の負担を軽くし、仕事の効率化を図って一人の医師の能力をもっと有効に活用していくことも考えなければなりません。特に、指導医に余裕が生まれると、そこには研修医が集まり、医師の数も増やせるという良い循環も生まれてくるのではないのでしょうか。

こうした提言をしたところ、新たな地域医療再生計画に「医療クラークの育成」が加わりました。医師の働く環境づくりも含め、医師不足解消に貢献できたらと思います。